

## 「春日権現験記絵」における神の示現 春日若宮を中心として

相模女子大学高等部 高池亜友美

春日若宮は、芸能託宣の神として中世春日信仰の中で勃興していった。それにも関わらず、「春日権現験記絵」において、一見すると重視されていないように感じられる。よって藤原氏北家繁栄祈願という本絵巻構想からして、藤原氏祖神でない春日若宮を排除したと考えられてきた。しかし、平安末期から中世における藤原氏は、春日若宮を排除するどころか、むしろその勃興に尽力していた。

さて、神の姿を見ることは憚られるという神祇観から、本絵巻では春日大明神が人の姿で《化現》する時、顔を顕にしない。春日若宮に至っては姿すら現れない。しかし全く除外するのではなく、絵巻の端々で春日若宮の存在を匂わせる。姿を秘すことで春日若宮が憚られるほど力を持つ神であることを伝えてはいないか。そこで《化現》の姿と、従来記載がないとされてきた春日若宮おん祭りについて着目し、「春日権現験記絵」を再考したい。

本絵巻での春日大宮の《化現》の姿は、一般的な春日大明神の垂迹姿とほぼ一致する。ところが春日三宮と春日四宮の童子姿のみ一般的な垂迹姿とは一致しない。これには、春日三宮と春日四宮の御子神春日若宮が関係していると考えられる。春日三宮や春日四宮の童子姿に、人は童子神春日若宮を、そして三神の血縁的繋がりをも想起させるのである。神性が武神的と祭司的との二面性を有する春日大明神は、本絵巻でも同一の〔束帯〕姿をもつ春日一宮と春日二宮、春日若宮を想起させる〔童子〕姿をもつ春日三宮と春日四宮というふたつの群を有する。本絵巻では、この二つの姿はしばしば対照的に描かれるのだ。

二つの姿が対照されている事例を見ていこう。例えば巻6段1では、〔束帯〕に対し、閻魔大王は「深く響応の気色」で座敷に对面し、両者が同等の存在として応対する。それに対し巻9段3では、大王は〔童子〕に「深く恐れ奉る気色」で廊にひれ伏している。本来周辺にいて下位存在である〔童子〕が閻魔大王の土下座により、敬意を払うべき存在になるという逆転が生じているのだ。巻7段3で、夢想託宣の場であった楼門に〔童子〕が、その段下に〔束帯〕が示現するのも象徴的であろう。〔童子〕の姿は〔束帯〕と同等、あるいは優越する力をみせるのだ。

ところで来歴を秘し突如出現した春日若宮は芸能者を引きつけ乱暴狼藉が横行する異空間を創出した。巻10段1では、春日若宮の芸能が神意に適うものと春日大宮が肯定していることが述べられている。この異質さを集約したのが、春日若宮おん祭りといえる。巻四段四で、他文献では管弦公事に優れた人物として賞される公教が、春日若宮おん祭り執行を妨害した咎により、重病・死、と氏人の中で唯一春日大明神に救われない人物として語られていることは、春日若宮に対する敬意の表明されたものとして注目に値する。即ち、従来の見解とは逆に本絵巻は春日若宮を尊重していると論者は考える。

「春日権現験記絵」に現れる春日信仰とは、過去を踏襲しつつも春日若宮といった新たな信仰を取り込んだ。変容し隆盛する今の春日大明神を寿ぎ、今の未来の藤原氏を予祝したのである。